

教育研究業績書

2017年10月20日

所属：健康・スポーツ科学科

資格：教授

氏名：田中 繁宏

研究分野	研究内容のキーワード
学位	最終学歴
博士（医学）	大阪市立大学 医学部 卒業

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
1. 暮らしの医学ノート	2004年04月	呼吸器、循環器、消化器などの臓器別解説。アレルギー疾患。喫煙と禁煙。生活習慣病の理解とその予防。運動における生理学。救急処置。旅行医学。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. やさしいチューデントトレーナーシリーズ スポーツ医学	共	2016年3月31日	嵯峨野書院	藤本繁夫・大久保衛・田中繁宏・田中史朗 トレーナー、アスレティックトレーナーを目指す人などを対象に知っておかなければならない項目を中心に解説した。執筆担当。担当 (pp. 25~30, pp. 58, pp. 112~120, pp. 187~191, pp. 202~204)
2. 呼吸機能の臨床一検査方法から症例検討まで	共	1996年	中外医学社	鈴木俊介・永井厚志編集、藤本繁夫・田中繁宏 論文作成担当。担当 (pp. 158~169)
2 学位論文				
1. The effect of Loratadine, an H ₁ antihistamine, on induced cough in nonasthmatic patients with chronic cough	共	1996年10月	Thorax, 51	Shigehiro Tanaka, Kazuto Hirata, Naotsugu Kurihara, Junichi Yoshikawa, Tadao Takeda. 咳嗽が8週間以上つづく喘息因子のない患者において、1分間蒸留水吸入誘発咳嗽試験(Placebo controlled, double blind cross over 法)を施行した。患者群では咳感受性が亢進し、咳回数は抗H ₁ ブロッカーのロラタジンで健常人に比し、有意に抑制された。
2. 慢性咳嗽患者における蒸留水吸入誘発咳嗽に対する吸入抗コリン薬及び吸入β ₂ 刺激薬の影響	単	1996年1月	アレルギー, 45 (1)	田中繁宏 明らかな心・肺疾患のない4週間以上咳嗽が続く患者を対象に、1分間・3分間蒸留水吸入誘発試験に対する吸入抗コリン薬及びβ ₂ 刺激薬の効果を検討した。吸入抗コリン薬は健常人に比しその効果は明らかでなかったが、吸入β ₂ 刺激薬は有意な効果を示した。
3 学術論文				
1. Increased Adipose and Muscle Insulin Sensitivity Without Changes in Serum Adiponectin in Young Female Collegiate Athletes	共	2017年15(5)	Metabolic Syndrome and Related Disorders	持久性トレーニングと体組成、アディポカイン、炎症性マーカーなどとの関係は若年アジア人ではほとんど研究されていない。インスリン感受性(抵抗性)に関して、運動選手(170人)及び一般学生(311人)(18-24歳)で検討した。血液中レプチンとTNF-αはアスリートで低かったが、アディポネクチンやインスリン抵抗性は差がなかった。持久性トレーニングは脂肪組織や骨格筋のインスリン感受性を良くするが正常体重若年女性間では血液中アディポネクチン

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
2. Characteristics and prevalence of eating disorders in aesthetic athletes	単	2015年3月3日	Mukogawa J Health and Exercise Science, vol 5 (1)	は差がなかった。 摂食障害 (ED)はノンアスリートに比べアスリートで比較的多くみられ、特に審美的スポーツや長距離ランナーなどで多いことが知られている。2013年米国精神科学会によりEDのサブグループの診断基準が明確になるようDSM-IVからDSM-5に改定された。審美的スポーツではパフォーマンスの発揮のため細くなり、このことでEDと関係した。特にバレエダンサーで顕著だった。その中には身体醜形障害 (BDD)と診断されるものもある。さらに体操選手では体重と外見が関与しEDが見られる。この存在を知り、彼らには早い段階での発見と治療が重要である。
3. 日本人若年女性の運動中の腹圧性尿失禁に関する検討	共	2014年4月	日本臨床スポーツ医学会誌, 2014 22(2)	山本佐保、田中繁宏 本邦での若年女性ではほとんど報告がない女子大学生において、運動中の尿失禁に関してアンケート調査を行った。腹圧性尿失禁は中高齢者と同様に認められた。運動中尿失禁はパフォーマンスにも影響する可能性があり、適切な理解や時に予防のためのトレーニングが必要と考えられた。
4. Commotio Cordis: importance of awareness	単	2014年3月	Mukogawa J Health and Exercise Science, vol 4 (1)	Shigehiro. Tanaka Commotio Cordis(後心臓心震盪と名づけられた)は米国での報告以後本邦でも報告されるようになった。米国や日本などその他の国でも救命率が増加して、一般に知られることの重要性が認識された。まだまだ知らない人も折られるため、今後も運動に携わる方々や一般の人にもCommotio cordisを知ることの重要性を伝えていく必要がある。
5. 慢性咳嗽の分類、メカニズムと治療 -最近の話題を中心に-	単	2013年3月	西宮市医師会雑誌, 18	田中繁宏 慢性咳嗽は臨床上、時に遷延性咳嗽(3-8週間)と慢性咳嗽(8週間以上)に分けられる。それらの原因、機序と治療法を分類した。気道の反射と、異物除去を目的とした咳嗽のメカニズムの研究がTRPA1, TRPV1受容体等の発見で飛躍的に進歩した。慢性咳嗽での漢方薬の効果の機序の研究も進展が望まれる。
6. Validity of the Stages of Exercise Behavior Change Based on Body Composition by Using DXA in Female Japanese University Student	共	2013年	Int. J. Sports Health Sci. vol 11	Hiroshi Matsumoto, Shigehiro. Tanaka DXAによる体組成測定結果と193名の日本人女子大学生の運動習慣レベルを評価した。活発なレベルの学生たちは最も低い体組成で最も高い骨密度を示した。
7. Relationship between Peak V02 and Subcutaneous Fat Thickness of the Thigh Measured by Ultrasonography	共	2012年9月	Osaka City Med J, vol 58	Shigehiro Tanaka, Kana Goto1, Saho Yamamoto, Aya Arai 日常生活活動や体組成は全身持久力の代用となるが、エコーによる脂肪厚は今まで評価されていない。今回、大腿前部、外側部、内側部の脂肪厚を測定しpeak V02との関係を検討した。大腿前部、外側部の脂肪厚はpeak V02と正相関したが、内側部は相関しなかった。さらにpeak V02は、本研究では体組成と相関傾向を認めた。これらからエコーによる脂肪厚は全身持久力の評価に有用な可能性が示唆された。
8. Chronic cough in patients with post-infectious cough ? Three case reports	共	2012年9月	J Hyogo Medical Association, vol 54	Shigehiro. Tanaka, Hiroshi Matsumoto 3例の慢性咳嗽患者を経験した。1例は感染後咳嗽または咳喘息。2例目は百日咳と考えられ、抗ヒスタミン剤と麦門冬湯で治療された。3例目はマイコプラズマ感染後咳嗽で、抗ヒスタミン剤と麦門冬湯で治療された。感染後咳嗽の発生機序は不明だが、抗ヒスタミン剤や麦門冬湯が効果を示す例が多い。慢性咳嗽の機序や薬剤の効果に関して、今後も研究が必要と考えられた。
9. Patients with aspergillosis-Case report	共	2012年3月	J Nishinomiya Medical Association, vol 17	Shigehiro. Tanaka, Saho. Yamamoto, Aya. Arai, Takahito. Yoshikawa 日本で白癬菌症の報告が増加している。体育系学生で白癬菌症に関する認識調査を行った。全対象者(210名)の中で、7名のみが白癬菌感染症についての知識があった。さらに対象者全員が白癬菌に感染したものはなく、空手部でも無かった。中学校で武道が必修となるため、白癬菌症に関する知識および予防の知識を広めることが必要と考えられた。
10. 衣服着用が水銀血圧計および自動血圧計による血圧測定値に及ぼす影響	共	2011年11月	日本臨床スポーツ医学会誌, 2012 19 (2)	田中繁宏、五藤佳奈、新井彩 血圧測定は自動血圧計の普及とともにスポーツ施設で簡単に行われる。血圧測定で、測定部における衣服や袖の存在が問題となることがある。今回、若年女性20名を対象に水銀血圧計および自動血圧計による衣服(Tシャツ、トレーナー、トレーナーとフリース)着用時での血圧測定結果を検討した。自動血圧計による血圧測定では2枚重ね時の拡張期の血圧測定値がTシャツ、トレーナーの測定結果に比べ有意に高かった。今回の研究では、自動血圧計による血圧測定は測定部位に2枚以上の衣服がない状態で測定する

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
11. 脳神経・内分泌学からみた運動と食欲の関係	共	2011年10月	健康運動科学, 2 (1)	<p>のが最も望ましいと考えられた。正常血圧学生ではトレーナーまたはそれらよりも薄い衣服を着たままでの血圧測定では、Tシャツ着用時とほとんど同じと考えられた。</p> <p>吉川貴仁、山本佐保、田中繁宏 食行動と消化管ホルモンのに関し、運動と食欲、食事摂取量の関係に関してホルモンの役割について述べた。運動は過食や肥満を防ぐ重要な役割を担っていること。消化管ホルモン血中動態の運動による変化と食欲やエネルギーバランスに与える影響では、食事をする事でホルモン環境が変化し食べる欲求が減ることが重要な要素と考えられている。適度な運動と工夫された食生活が健康的な体重、体型を維持される方策が可能なる事がホルモン調節の理解と運動療法で提示された。</p>
12. Willingness to accept novel H1 N1 influenza A vaccine by Japanese athletic and non athletic students in 2009	共	2011年1月	Mukogawa J Health and Exercise Science, vol 2 (1)	<p>Shihehiro.Tanaka, Aya.Arai, Saho.Yamamoto, Takahito.Yoshikawa ブタインフルは空港などで流行阻止が試みられていた。しかし、神戸でのバレーボールの試合でブタインフル患者が出て広がった。そのため、体育系学生と非体育系学生でインフルエンザの予防接種希望の調査を行った。体育系学生も資格取得希望者の多い食物栄養学科の学生のどちらも比較的接種希望者が多かった。特に健康スポーツの学生は、インフルエンザ流行期に試合などがあるクラブが多いため予防には注意すべきと考えられた。</p>
13. 衣服着用が水銀血圧計および自動血圧計による血圧測定値に及ぼす影響	共	2011年1月	日本臨床スポーツ医学会誌, 2012 19 (2)	<p>田中繁宏、五藤佳奈、新井彩 血圧測定は自動血圧計の普及とともにスポーツ施設で簡単に行われる。血圧測定で、測定部における衣服や袖の存在が問題となることがある。今回、若年女性20名を対象に水銀血圧計および自動血圧計による衣服 (Tシャツ、トレーナー、トレーナーとフリース) 着用時での血圧測定結果を検討した。自動血圧計による血圧測定では2枚重ね時の拡張期の血圧測定値がTシャツ、トレーナーの測定結果に比べ有意に高かった。今回の研究では、自動血圧計による血圧測定は測定部位に2枚以上の衣服がない状態で測定するのが最も望ましいと考えられた。正常血圧学生ではトレーナーまたはそれらよりも薄い衣服を着たままでの血圧測定では、Tシャツ着用時とほとんど同じと考えられた。</p>
14. 女子学生バレーボール選手 (関西学生1部リーグ所属) における体組成と全身持久力の特徴	共	2010年3月	健康運動科学, 1	<p>田中繁宏、五藤佳奈、保井俊英 女子バレーボール選手 (インターハイ優勝) と同じく優勝のバスケットボール選手では身長、体重、体脂肪率 (%) は選手間では有意差がなかった。一方、ギリシアの競技バレーボール選手163名の研究では、ナショナルチームクラスの選手でも比較的体脂肪率が高い。今回、関西1部リーグの学生バレーボール選手と体育系非運動部所属の学生で体組成を比較検討した。バレーボール選手は一般学生に比べ最大酸素摂取量が高く、体脂肪率が低く、よく鍛錬されていた。スポーツ特異性の体組成の報告は少なく、今後これらに関する民族特異的なホルモン分泌量を含め、より詳細な研究が必要と考えられた。</p>
15. アスリートと咳 (慢性咳嗽を中心に) - 最近の研究の動向 -	単	2010年12月	健康運動科学, 1	<p>田中繁宏 アスリートにとって慢性咳嗽は集中力や持続力を妨げる。これまでの国内外における研究を中心に、アスリート、トレーナー、スポーツドクターの方々にも広く認識していただくことを目的に、慢性咳嗽の原因、頻度、機序と治療法を検討した。気道の痛みに対する反射の研究と、異物除去を目的とした咳嗽のメカニズムの解明についての研究が関連していると考えられる。慢性咳嗽の治療は鼻炎、喘息などの治療が中心で、GER合併の喘息患者ではPPIを3ヶ月間投与したことで喘息症状が70%改善する。</p>
16. 乗用カート使用によるゴルフラウンドでの血圧、脈拍の変化	共	2008年03月	武庫川女子大学紀要 (自然科学)	<p>田中繁宏、大島秀武、三村達也、宮本忠吉、弘原海剛、藤本繁夫 ゴルフラウンド中は仕事に比べ概ね脈拍が上昇し、血圧はラウンド開始時のみ高く、ゴルフラウンドは適度な運動と考えられた。スタート時は緊張からか血圧が上がるので心疾患患者ではリラックスすべきと考えられた。</p>
17. GERD により慢性咳嗽を呈した壮年者に関する一考察	共	2008年03月	武庫川女子大学紀要 (自然科学)	<p>田中繁宏、寄田法子、山下絵里、澤田晴美、岡本美穂、高村竜一郎、大田剛弘 胃食道逆流関連疾患での喘息や慢性咳嗽患者の本邦報告例は比較的高齢者が多く、食道ヘルニアの合併例が多い。これまで比較的若年者の例は少なかったが、食生活の欧米化の影響で増加する可能性があり懸念すべき疾患と考えられた。</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
18. Inhibition of hypertonic saline induced cough by Loratadine in nonatmmatic patients with chronic cough	共	2008年03月	Bull. Mukogawa Women's Univ. Nat. Sci.	Shigehiro Tanaka, Tatsuo Fujii, Kazuto Hirata, Shigeo Fujimoto 高張食塩水吸入による咳嗽に対するloratadineの効果を喘息のない慢性咳嗽患者(対照は健康人)で検討した。高張食塩水吸入による咳嗽は再現性があり、慢性咳嗽患者では有意に高張食塩水吸入による咳嗽をloratadineが抑制したが、健康人では咳嗽抑制作用を認めなかった。慢性咳嗽患者ではヒスタミン感受性が亢進している可能性が示唆された。
19. 授業「キャンプ実習」に関する研究(4)―4ヶ年の基礎研究比較と総合評価―	共	2008年03月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学)	中村哲士、保井俊英、會田宏、小柳好夫、中西匠、永田隆子、田中繁宏、西坂珠美、松岡紗也香、野老稔 スキー実習は経済的で技術習得などの達成感があり、学生の高評価を得ている。それでも全般的な事前学習は十分とは言えず改善の余地がある。さらに、天候変化に順応する応用力の教育も事前学習させるときに重要と考えられた。
20. 授業「キャンプ実習」に関する研究(3)―3ヶ年の基礎研究比較と総合評価―	共	2007年03月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学)	中村哲士、保井俊英、會田宏、小柳好夫、松本裕史、田中繁宏、四元美帆、西坂珠美、野老稔
21. 立位姿勢での大腿四頭筋セッティングの検討―内側広筋活動に着目して―	共	2007年03月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌	得能三貴、小柳好生、相澤徹、田中繁宏、山本嘉代、安田良子 立位での大腿四頭筋セッティングは座位などより外側広筋の筋活動を向上させ、有用と考えられた。立位での大腿四頭筋セッティングにおいて、半腱様筋筋活動上昇せず、半腱様筋に関しては有用との評価はできなかった。
22. 喘息または喘息様症状を来した2例に関する一考察	共	2007年03月	武庫川女子大学紀要(自然科学)	田中繁宏、垂井彩未、寄田法子、山下絵里、高村竜一郎、太田剛弘 喘鳴を来たす疾患として、GERによる喘息、喘息と違うメカニズムにより起こるアナフィラキシーを紹介した。一般に知られていないので、これらに関する知識が重要と考えられた。
23. 女子アスリートによるトレッドミル走行または歩行によるVO2-kineticsでの運動能力の評価	共	2007年03月	武庫川女子大学紀要(自然科学)	田中繁宏、垂井彩未、渡辺好美、広瀬由美子、四元美帆、中村真理子 1分間80m歩行の時定数は最大酸素摂取量と相関関係はなかったが、200m走行での時定数は相関関係があった。軽い負荷での時定数は運動能力の評価には考慮すべき点があるが、強い負荷での時定数は運動能力の評価に有用と考えられた。
24. 思春期アスリートによる尿中成長ホルモンおよびテストステロンと体組成の関係	共	2007年03月	武庫川女子大学紀要(自然科学)	田中繁宏、垂井彩未、黒部優、岡本京子、四元美帆、中村真理子、南匡泰 testosteroneと体組成の研究はほとんどないが、GHは体組成と相関すると報告されている。しかし、今回測定した尿中GH、testosteroneではどちらも相関しなかった。今後一層の研究が必要と考えられた。
25. 2次健康診断での脈波伝搬速度計測導入の試み	共	2006年12月	学校保健研究	田中繁宏、垂井彩未
26. 超音波検査法による左室機能の評価―B-mode法とm. Simpson法による比較―	共	2006年03月	武庫川女子大学紀要(自然科学)	四元美帆、田中繁宏、中村真理子、野老稔
27. 成人の顔面皮疹を来す疾患および注意すべきウイルス性疾患に関する一考察	共	2006年03月	武庫川女子大学紀要(自然科学)	田中繁宏、四元美帆、中村真理子、相澤徹
28. スキー実習中の身体活動が脈波伝搬速度に及ぼす影響	共	2006年03月	武庫川女子大学紀要(自然科学)	中村真理子、田中繁宏、四元美帆、目連淳司、野老稔
29. 流行性耳下腺炎と化膿性耳下腺炎の2例に関する一考察	共	2005年03月	武庫川女子大学紀要(自然科学)	田中繁宏、相澤徹、四元美帆、小柳好生、野老稔
30. 授業「キャンプ実習」に関する研究(1)―参加者の意識・行動・学習・達成レベルの基礎的検討―	共	2005年03月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学)	中村哲士、保井俊英、會田宏、小柳好夫、田中繁宏、永戸久美、四元美帆、野老稔
31. 若年女性における主観的健康観と健康行動セルフエフィカシーとの関連	共	2005年03月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学)	松本裕史、坂井和明、野老稔、田中繁宏、相澤徹、會田宏、小柳好夫、中村真理子、四元美帆
32. Relationship among muscle oxygenation, muscle blood volume, and femoral artery blood flow during prolonged constant work-rate leg exercise	共	2003年12月	Jpn. J Appl. Physiol. 33巻 6号	Tatsuya Mimura・Shigehiro Tanaka・Takahiko Kawarabayashi・Kazunari Ishihara・Taketaka Hara・Hiroschi Fujiwara・Shigeo Fujimoto 9人の健康男性で嫌気性閾値以下で、エルゴメータによる30分の持続運動を施行した。下肢血液量、血流量は有意に増加した。これは運動筋酸素化に関与していると考えられた。実験担当。全(pp. 7)担当(pp. 335~342)
33. 呼吸器疾患での珍しい症例	共	2003年03月	武庫川女子大紀要(自然科学)	田中繁宏・相澤徹・四元美帆・小柳好夫・野老稔・若山公作・玉垣芳則 これまで経験したABPA、マイコプラズマ感染症、肝

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
34. Relationship among muscle oxygenation, blood lactate concentration, and substrate utilization during prolonged exercise below anaerobic threshold	共	2003年	Adv. Exerc. Sports Physiol 9巻 4号	・肺症候群の珍しい3例を報告した。執筆担当。全 (pp. 6) 担当 (pp. 7~12) Tatsuya Mimura・Shigehiro Tanaka・Kazunari Ishihara・Tsuyoshi Wadazumi・Tadayoshi Miyamoto・Hiroshi Fujiwara・Shigeo Fujimoto 実験担当。全 (pp. 7) 担当 (pp. 111~117)
35. 長時間の定常負荷運動時の近赤外分光法による筋内酸素動態の意義	共	2003年	教育医学 49巻 3号	三村達也・田中繁宏・石原一成・弘原海剛・藤原寛・藤本繁夫 実験担当。全 (pp. 8) 担当 (pp. 222~229)
36. A case of solitary mass shadow caused by Mycoplasma pneumoniae	共	2002年03月	Bull. Mukogawa Women's Univ. Nat. Sci. 50巻	Shigehiro Tanaka・Toru Aizawa・Miho Yotsumoto・Yoshio Koyanagi・Minoru Tokoro・Kazuto Hirata・Hiroshi Fujiwara・Shigeo Fujimoto マイコプラズマ肺炎は市中肺炎として一般に知られている。レントゲン上の陰影は多彩だが結節影の報告はほとんどない、今回、肺腫瘍との鑑別を要した稀な症例を経験した。結節影の原因はアレルギー反応や無気肺が考えられた。データ収集、診療、執筆担当。全 (pp. 5) 担当 (pp. 7~11)
37. 虚弱高齢者の自立生活に必要な身体機能水準の設定	共	2002年	デサントスポーツ科学 24巻	石原一成・藤本繁夫・田中繁宏・三村達也・西本勝夫 全 (pp. 9) 担当 (pp. 193~201)
38. 大学生に対するスポーツ医学について 生涯の健康維持のための運動の動機づけ	共	2001年12月	大阪市立大学保健体育学紀要 37巻	藤本繁夫・田中繁宏・石原一成・三村達也・原丈貴・大島秀武・宮本忠吉 担当 (pp. 1~6)
39. ゴルフラウンドでの心拍や血圧の変化	単	2001年12月	大阪市立大学保健体育学紀要 37巻	論文作成。全 (pp. 45~47)
40. 喘息患者などでのゴルフラウンドでの心拍や血圧の変化に関する一考察	共	2001年12月	大阪市立大学保健体育学紀要 37巻	田中繁宏・三村達也・石原一成・原丈貴・藤本繁夫 論文作成担当。担当 (pp. 29~33)
41. ガス交換の場としての筋肉と運動	共	2001年	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 11巻	田中繁宏・間本卓司・原丈貴・藤本繁夫、弘原海剛・三村達也・石原一成 NIRSにより運動筋のガス交換能や限界の解釈が可能でトレーニングの評価ができ、筋内のガス交換が運動能力や筋内の代謝に関与すると考えられた。論文作成担当。全 (pp. 3) 担当 (pp. 81~83)
42. バランストレーニングが介護を必要とする後期高齢者の平衡機能を改善するか？—老人保健施設入所中の3例における検討—	共	2001年	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 11巻	石原一成・三村達也・西本勝夫・田中繁宏・藤本繁夫 バランストレーニングによって、平衡機能が改善する対象が認められたが、身体機能の改善や認識、心理面に及ぼす効果に異なるタイプがあった。トレーニングで集団指導のなかに個別指導を取り入れていくなどの指導上の配慮をすることが望ましいことを報告した。データ収集担当。全 (pp. 3) 担当 (pp. 33~35)
43. 老人保健施設入所女性のADLとQOLおよび身体機能との関連性	共	2001年	理学療法科学 16巻 4号	石原一成・三村達也・弘原海剛・西本勝夫・田中繁宏・藤本繁夫 高齢者老健施設入所者 (24名、平均81才) において、ADLは歩行能力、柔軟性などと関係し、QOLはADLに加え抑うつ度と関係した。今後、今回の研究での成果は高齢者の運動プログラム作成に有用と考えられた。データ収集担当。担当 (pp. 179~185)
44. 在宅高齢女性の身体機能とADLおよびQOLの関連性	共	2001年	教育医学 46巻 5号	石原一成・三村達也・弘原海剛・三村寛一・西本勝夫・田中繁宏・藤本繁夫 在宅高齢女性の身体機能とADLおよびQOLとを検討した。下肢の身体機能とADLは相関したが、QOLは抑うつ度などの精神的要因と関係すると考えられた。情報収集担当。担当 (pp. 1142~1152)
45. ゴルフや海外遠征での歩数に関する一考察	共	2000年12月	大阪市立大学保健体育学紀要 36巻	田中繁宏・三村達也・石原一成・弘原海剛・藤本繁夫 ゴルフや海外遠征のスタッフでは一日歩数はほぼ一万歩を越し適度な運動となっていた。しかし、役割によっては運動不足となることもありこのような場合は一工夫必要と考えられた。いずれにせよ日頃の努力が大切と考えられた。論文作成担当。担当 (pp. 29~33)
46. 壮・老年者におけるゴルフのスコアと運動量	単	2000年12月	大阪市立大学保健体育学紀要 36巻	壮・老年者において、乗用カート使用でもラウンド中の歩数は1万歩を越し、十分な運動量と考えられ、むしろ高齢者には乗用カート使用によるラウンドが薦められた。論文作成。全 (pp. 51~53)
47. 老人保健施設における高齢者の転倒調査	共	2000年	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 10巻	石原一成・三村達也・弘原海剛・西本勝夫・田中繁宏・藤本繁夫・川村篤史・栗原直嗣 老人保健施設における高齢者の転倒調査において、転倒により生活の変化を余儀無くされる者が少なかった。従ってこれらの施設では転倒予防策を講じる必要があると考えられた。実験担当。担当 (pp.

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
48. ランプ負荷運動に伴う近赤外分光法 (NIRS) により測定した筋肉酸素動態の測定方法に関する検討—再現性及び特質性について—	共	2000年	体力科学 49巻	11~12) 弘原海剛・田中繁宏・三村達也・石原一成・大島秀武・宮本忠吉・藤本繁夫 ランプ負荷運動に伴う近赤外分光法 (NIRS) により測定した筋肉酸素動態 (NIRSslope, NT2) の再現性は良好であった。さらに、これらは負荷強度と関係し運動能力の評価に応用できる可能性が示唆された。実験担当。担当 (pp.129~138)
49. 定常負荷運動開始時の近赤外線分光法による筋肉酸素動態の検討—VO ₂ 時定数および無酸素性作業閾値との関係—	共	2000年	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 10巻	三村達也・石原一成・田中繁宏・藤本繁夫・弘原海剛・宮本忠吉 定常負荷運動開始時の近赤外線分光法による筋肉酸素化レベルの低下の程度は活動筋の酸素利用能と関係し、低いほど運動開始時に筋に酸素を取り込む濃度が高いと推察された。実験担当。担当 (pp.41~42)
50. 運動と免疫 (インターネット講座)	単	1999年12月	大阪市立大学保健体育学紀要 35巻	運動と免疫に関して、今までの風邪についてのアンケート調査やゴルフと歩数の調査、さらに運動負荷実験の採血から得られたリンパ球サブセットなどの研究成果や他の研究報告などから概説した。論文作成。全 (pp.59~62)
51. 乗用カート使用でのゴルフのスコアと歩数との関係 (高齢者3名の場合)	共	1999年12月	大阪市立大学保健体育学紀要 35巻	田中繁宏・弘原海剛・西本勝夫・三村達也・石原一成・藤本繁夫 乗用カート使用での高齢者のゴルフのスコアとラウンド中の歩数は、正相関を示し、乗用カート使用でも歩数は1万歩を少し超した運動量と考えられた。論文作成、データ収集担当。担当 (pp.19~23)
52. ランプ負荷運動を伴う近赤外分光法 (NIRS) の筋肉酸素濃度動態の検討—評価方法の試作と運動能力との関連について—	共	1999年01月	体力科学 48巻	弘原海剛・木村穰・大島秀武・宮本忠吉・田中繁宏・藤本繁夫 ランプ負荷運動中の筋肉内酸素濃度を筋赤外分光法により求め、NIRS slope, NT2およびNIRSfallのそれぞれについて検討した。Slopeは下肢筋の酸素離脱効率をNIRSfallは最大酸素交換率を示し、運動筋への酸素輸送能や酸素能力を示す指標になりうることを報告した。実験担当。担当 (pp.125~136)
53. 肺線維症と運動	共	1999年	臨床スポール医学 16巻 1号	田中繁宏・藤本繁夫 肺線維症患者さんでは安静時にはほとんど正常野SpO ₂ を示しても運動により急激にSpO ₂ が低下する。COPD患者さんと違って運動トレーニングも満足にできない。最終的には肺移植を考慮する現状を概説した。論文作成担当。担当 (pp.45~49)
54. Plasma endothelin-1 level in chronic obstructive pulmonary disease: Relationship with natriuretic peptide	共	1999年	Respiration 66巻	T. Fujii・T. Otsuka・S. Tanaka・H. Kanazawa・K. Hirata・M. Kohno・N. Kurihara・J. Yoshikawa 肺気腫患者で、エンドセリン-1は運動時急性の肺高血圧や低酸素血症と関係せず、持続性の低酸素血症と関係すると考えられる。ANP, BNPはエンドセリン-1と共に肺血管のトーンを調節していると示唆された。実験担当。担当 (pp.212~219)
55. 肥満症例における持続運動中の脂質酸化に及ぼす影響	共	1999年	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 9巻	浜純子・田中繁宏・石原一成・三村達也・石津泰子・片岡亜衣・藤本繁夫 実験担当。担当 (pp.15~17)
56. Bronchial injury and pulmonary edema caused by hydrogen sulfide poisoning	共	1999年	Am J Emer Med 17巻 4号	S. Tanaka・S. Fujimoto・Y. Tamagaki・K. Wakayama・K. Shimada・J. Yoshikawa 3例の硫化水素中毒を経験した。当初、3例目は軽症と考えられ、先に2例の重症例 (高濃度ガスを吸入: 2例とも呼吸停止状態) が運ばれた。しかし、3例目の当院来院時は心肺停止であった。硫化水素は相対的により低濃度でも長く吸入すると非常に危険なガスと考えられた。治療、論文作成担当。担当 (pp.427~429)
57. 壮・老年者のゴルフのスコアと歩数および医療上の問題点	共	1998年12月	大阪市立大学保健体育学紀要 34巻	田中繁宏・弘原海剛・西本勝夫・三村達也・石原一成・石津泰子・片岡亜衣・浜純子・藤本繁夫 壮・老年者においてゴルフのスコアと歩数が相関した。さらに歩数は一万歩を越し、ゴルフは適度な運動として薦められた。アマチュアゴルフでの医療上の問題点はこむら返りぐらいで大きな問題はなかった。論文作成、データ収集・解析担当。担当 (pp.39~42)
58. 特集 スポーツと栄養とその栄養生理	共	1998年	輸液栄養JJPEN 20巻	藤本繁夫・田中繁宏・澤田千栄・早川公康・松岡愛 スポーツ時の栄養生理について、三大栄養素であるたんぱく質、脂肪、炭水化物のそれぞれに、栄養素の摂取と吸収、エネルギーの貯蔵、エネルギー利用について解説した。さらに運動中のエネルギー代謝について運動条件との関係、訓練の代謝に及ぼす影響について解説した。担当 (pp.3~11)
59. 運動誘発性喘息	共	1998年	体力科学 47巻	藤本繁夫・田中繁宏 運動誘発性喘息 (EIA) についての総説を自験例及び

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
60. 運動中断時の負荷量の差が回復期の呼吸パターンおよび酸素摂取量の回復動態に及ぼす影響	共	1998年	日本臨床生理学会雑誌 28巻	文献的にまとめた論文である。EIAとそのメカニズムについて、EIAに関与する因子、EIAを検出するための運動負荷法EIAの運動禁忌、EIA予防のための薬物療法、EIAの運動療法とその訓練効果について総合的に解説した。担当 (pp. 453~459) 大島秀武・田中繁宏・宮本忠吉・弘原海剛・藤本繁夫 健康人の最大運動後の呼吸パターンとVO ₂ の回復動態に及ぼす影響について検討した。中断時にRCが検出された群はされなかった群に比べて浅早型の呼吸パターンを呈し、回復期のVO ₂ のfirstコンポーネントの時定数も有意に延長したことより中断時の換気レベルが関与する。実験担当。担当 (pp. 211~219)
61. Effect of endurance training above the anaerobic threshold on isocapnic buffering phase during incremental exercise in middle-distance runners	共	1998年	Jpn. J Physical Fitness sports Med 47巻	Y. Oshima・S. Tanaka・T. Miyamoto・T. Wadazumi・N. Kurihara・S. Fujimoto 8名の中距離ランナーに6ヵ月間の運動訓練を行い、最大運動能、嫌氣的解糖閾値および血中乳酸の緩衝能に及ぼす効果を検討した。その結果、いずれの緒量も有意な増加を示し、最大運動能の増加にはATよりも血中乳酸の緩衝能の改善の程度が影響した。実験担当。担当 (pp. 43~52)
62. 健常学生での継続運動の有無による感冒罹患に関するアンケート調査	共	1998年	臨床スポーツ医学 15巻	田中繁宏・藤本繁夫・大島秀武・宮本忠吉・弘原海剛 本学学生226名に対して、継続運動(クラブ活動)の有無での感冒罹患に関するアンケート調査を施行した。クラブ活動を通じて運動をしている人は感冒の罹患頻度が2.7回/年で運動をしていない人(2.2回/年)より高かった。運動を続ける人は感冒予防に注意が必要と考えられた。論文作成、アンケート調査担当。担当 (pp. 83~86)
63. 高酸素及び低酸素吸入下のランブ負荷運動に伴う下肢筋肉内酸素濃度動態の解析の試み	共	1998年	関西臨床スポーツ医学研究学会誌 8巻	弘原海剛・田中繁宏・大島秀武・藤本繁夫・宮本忠吉・木村穰 健常者のランブ負荷運動で下肢筋肉内酸素濃度動態の検討では高酸素吸入(40%O ₂)ではNTが変化せず、低酸素吸入下(16%O ₂)で障害された。実験担当。担当 (pp. 23~25)
64. シサプリド、吸入オキシトロピウムが効果を示した胃食道逆流による慢性咳嗽の一例	共	1997年09月	呼吸 16巻	田中繁宏・藤本繁夫・藤井達夫・平田一人・栗原直嗣・吉川純一 胃食道逆流(GER)は慢性咳嗽の原因の1つで欧米での報告は多い。しかし、本邦報告は稀である。その原因として体格や食事などの違いが考えられるが明らかではない。今回、シサプリド、吸入オキシトロピウムが効果を示したGERによる慢性咳嗽の一例(52歳、男性)を経験した。論文作成、症例の治療担当。担当 (pp. 1340~1343)
65. 胃食道逆流による気管支喘息と考えられた一例	共	1997年05月	アレルギー 46巻	田中繁宏・藤本繁夫・藤井達夫・少路誠一・平田一人・栗原直嗣・吉川純一 胃食道逆流(GER)は喘息の原因となることは欧米では以前から指摘されている。しかし、本合併の本邦報告例は稀である。本邦報告3例目となるGERによる気管支喘息の1例を経験した。症例は73歳、男性、主訴は呼吸困難である。本例では食事指導、H2ブロッカー等で治療できた。論文作成、症例の治療担当。担当 (pp. 433~437)
66. Relationship between isocapnic buffering and maximal aerobic capacity in athletes	共	1997年	Eur J Appl Physiol 76巻	Y. Oshima・T. Miyamoto・S. Tanaka・T. Wadazumi・N. Kurihara・S. Fujimoto 15例の鍛錬者の最大運動能力に及ぼす乳酸緩衝能(IB)の関与をみた論文である。VO ₂ maxはHHVとは相関を示さなかったが、嫌氣的解糖閾値(AT)および呼吸代償閾値と有意な相関を示した。同対象の運動能には、ATに加えIBの重要性を示唆した。実験担当。担当 (pp. 409~414)
67. 食中毒、特に病原性大腸菌O-157について	共	1997年	CAMPUS HEALTH 33巻	藤本繁夫・田中繁宏 細菌性の食中毒について、特に病原性大腸菌O-157に関する総説。すなわち、食中毒の現状を述べ、病原性大腸菌O-157の特徴、症状、溶血性尿毒症症候群について解説した。さらに、食中毒の予防について述べた。担当 (pp. 29~35)
68. 近赤外分光法による運動負荷時酸素動態の体力指標としての有用性	共	1997年	Therapeutic Research 18巻	弘原海剛・木村穰・大島秀武・宮本忠吉・田中繁宏・藤本繁夫 ランブ運動負荷中の下肢筋の酸素濃度を近赤外線分光法(NIRS)により測定しその解析方法の新たな指標を作成した。すなわち、NIRSの低下の程度をNIRS slope、最大の減少率を%NIRS fallとして示し、体力指標として有用になりうる可能性を示した。実験担当。担当 (pp. 2312~2314)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
69. 慢性閉塞性肺疾患患者における運動誘発性低酸素血症と長期予後の関係	共	1997年	日本胸部疾患学会雑誌 35巻	藤井達夫・栗原直嗣・大塚敏広・田中繁宏・金澤博・工藤新三・平田一人・藤本繁夫・吉川純一 慢性閉塞性肺疾患患者における肺血管障害は、右室負荷の増大による運動中の心拍出量の増加制限を介して末梢筋への酸素運搬を障害し、運動能力の低下をもたらすことが示唆された。同患者において、肺血管障害は運動能力を決定する上で重要な因子であると考えられた。運動負荷検査担当。担当 (pp. 934~941)
70. がん告知に関する健常学生での意識調査	共	1997年	Campus Health 33巻	田中繁宏・藤本繁夫・大島秀武・宮本忠吉・弘原海剛・澤田千栄・松岡愛・早川公康 がん告知に関する意識調査を320名の本学学生に対して施行した。将来、もしがんになったとしても告知を8割以上が希望していて男女差がなかった。人生の終わりはその人の人生のある意味では総決算であり、自分の病気に関して事実を知ることが重要なことと考えられた。論文作成、アンケート調査担当。担当 (pp. 76~81)
71. 最大運動負荷後の酸素摂取量の回復動態と血中乳酸、グルコースおよびアラニンの関係	共	1997年	体力科学 46巻	大島秀武・田中繁宏・宮本忠吉・弘原海剛・藤本繁夫・栗原直嗣 健常人の最大運動後のVO ₂ 回復過程には、運動回復期の乳酸代謝よりもアラニン代謝を介した糖新生の関与を示唆した論文である。実験担当。担当 (pp. 479~488)
72. 持久運動時のリンパ球サブセットの変化(2例における検討)	共	1997年	大阪市立大学保健体育学研究紀要 33巻	田中繁宏・大島秀武・松岡愛・澤田千栄・早川公康・弘原海剛・西本勝夫・藤本繁夫 我々の調査で感冒罹患の頻度は運動をしている人はしていない人より高かった。免疫能の低下がその理由と考えられるが、詳しく調べるために、強い運動と軽い運動を1時間行い、末梢血リンパ球の変化をみた。CD4/8は強い運動で低下し、一時的な免疫能の低下が示唆された。論文作成、実験担当。担当 (pp. 31~34)
73. 慢性咳嗽を示した逆流性食道炎の一例	共	1996年06月	アレルギー 45巻	田中繁宏・藤本繁夫・少路誠一・工藤新三・平田一人・栗原直嗣・吉川純一 Irwinらは慢性咳嗽患者の原因を後鼻漏、喘息、慢性気管支炎、胃食道逆流(GER)等に分類し、治療法も論じた。一方、GERによる咳嗽の本邦報告例は少ない。今回、8週間以上咳嗽が続く慢性咳嗽を主訴とした逆流性食道炎の1例を経験し、プロトンポンプ阻害薬などで治療した。論文作成、症例の治療担当。担当 (pp. 584~587)
74. 水中歩行運動時の換気効率に及ぼす影響—陸上歩行時との比較—	共	1996年05月	臨床スポーツ医学 13巻	藤本繁夫・宮本忠吉・田中繁宏・大島秀武・栗原直嗣・前田如矢 健常人の横隔膜水位では、肺気量の低下と細気管支での閉塞所見が出現するが、運動時の換気反応は良好に保たれ、水圧の悪影響は認められなかった。特に、水中運動時では早期にATに至るが、AT以上のVO ₂ が増した条件でお換気効率が良好であったことを報告した。実験担当。担当 (pp. 547~552)
75. 気管支喘息	共	1996年01月	臨床スポーツ医学 13巻	田中繁宏・藤本繁夫・栗原直嗣 喘息患者は運動後、運動誘発性気道収縮(EIB)を起こすことがあり(これを運動誘発性喘息(EIA)という)、スポーツを指導する立場の人などでは注意を要する。これらEIAの患者ではスポーツをさせないのではなく、適度な運動や上手にトレーニングを続けることが大切である。論文作成担当。担当 (pp. 29~35)
76. 慢性咳嗽患者における蒸留水吸入誘発咳嗽に対する吸入抗コリン薬及びβ2刺激薬の影響	単	1996年01月	アレルギー 45巻	明らかな心・肺疾患のない4週間以上咳嗽が続く患者を対象に、1分間・3分間蒸留水吸入咳嗽誘発試験に対する吸入抗コリン薬及びβ2刺激薬の効果を検討した。吸入抗コリン薬は健常人に比しその効果は明らかでなかったが、吸入β2刺激薬は有意な効果を示した。論文作成、実験。全 (pp. 17~27)
77. TreadmillによるStep負荷時のVO ₂ -kinetics解析方法の検討—呼吸移動平均に関して—	共	1996年	日本臨床生理学会雑誌 26巻	宮本忠吉・田中繁宏・大島秀武・栗原直嗣・前田如矢・藤本繁夫 実験担当。担当 (pp. 293~300)
78. 気管支喘息:Cough variant asthma (CVA)	共	1996年	日本内科学会雑誌 85巻	平田一人・田中繁宏・少路誠一 担当 (pp. 80~84)
79. 水泳の安全性に関するメディカルチェックダイビング反射試験を中心に—IV. 心拍数と血圧に及ぼす水圧の影響	共	1996年	デサントスポーツ科学 17巻	藤本繁夫・田中繁宏・宮本忠吉・大島秀武・栗原直嗣 水泳の安全性に関するメディカルチェックとして心拍数と血圧に及ぼす水圧の影響を検討した論文である。水浸による心拍数は健常人COPD患者ともに酸素脈の増加を伴って減少したが、血圧は変わらなかった。また、運動に伴う心拍数の増加のslopeには水浸により変わらなかった。実験担当。担当 (pp. 34~40)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
80. 運動誘発性喘息をもつスポーツ選手と運動指導に関する一考察	共	1996年	大阪市立大学保健体育学研究紀要 32巻	田中繁宏・宮本忠吉・大島秀武・弘原海剛・早川公康・松岡愛・澤田千栄・藤本繁夫 運動誘発性喘息(EIA)は運動後の喘息発作で一般に健常人にはみられない。本学学生でも卒業後スポーツクラブをやめた後、EIAを来した例がある。これらの患者では、一般にスポーツをやめるのではなく、むしろすすめられていて退部後も適度に運動を続けることが重要である。論文作成、実験担当。担当(pp.19~23)
81. 近赤外分光法(NIRS)からみた筋肉内酸素動態に及ぼす有酸素トレーニングの影響	共	1996年	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 6巻	弘原海剛・大島秀武・宮本忠吉・木村穰・田中繁宏・藤本繁夫 Ramp負荷法による運動中において近赤外分光法により測定した筋肉内酸素濃度の第2屈曲点(NT2)の出現の遅延は運動訓練効果によることを報告した。この結果は従来より訓練効果の指標として使われているV _O ₂ max、AT、LTに加え、NT2が指標と成りうる可能性を示唆した。実験担当。担当(pp.57~59)
82. 定常負荷運動後のV _O ₂ 及びV _{CO} ₂ 回帰曲線の検討	共	1996年	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 6巻	宮本忠吉・大島秀武・弘原海剛・早川公康・松岡愛・澤田千栄・田中繁宏・藤本繁夫・前田如矢・栗原直嗣 定常負荷運動後のV _O ₂ の回復曲線の時定数は健常人の運動能力を表す指標に成りうる可能性を報告した。一方、V _{CO} ₂ の回復曲線に関しては負荷量や回復時間を考慮する必要性を示唆した。実験担当。担当(pp.53~55)
83. Differences in Breakpoint Patterns in the Muscle Oxygenation Curve Measured by NIRS during RAMP Exercise	共	1996年	Therapeutic Research 17巻	T. Wadazumi・Y. Kimura・Y. Oshima・T. Miyamoto・S. Tanaka・S. Fujimoto 健常人18名を対象に運動中の筋肉内酸素濃度を近赤外分光法により測定し、その動態の分析を行った。7例のNIRS屈曲一群は屈曲+群よりも大腿周囲径が大きく、VE、心拍数及びV _O ₂ は低い傾向を示した。NIRSの動態は運動中の下肢筋酸素能の指標になりうることを示した。実験を担当。担当(pp.55~59)
84. Effect of loratadine, an H1 antihistamine, on induced cough in non-asthmatic patients with chronic cough	共	1996年	Thorax 51巻	S. Tanaka・K. Hirata・N. Kurihara・J. Yoshikawa・T. Takeda 咳嗽が8週間以上つづく喘息因子のない患者において、1分間蒸留水吸入風発咳嗽試験(Placebo controlled, double blind crosses over法)を施行した。患者群では咳感受性が亢進し、咳回数は抗h1ブロッカーのロラタジンで健常人に比し、有意に抑制された。論文作成、実験担当。担当(pp.810~814)
85. Clinical significance of serum concentration of interleukin-8 in patients with bronchial asthma or chronic pulmonary emphysema	共	1996年	Respiration 63巻	H. Kanazawa・N. Kurihara・T. Otsuka・S. Tanaka・S. Kudoh・K. Hirata・T. Takeda 気管支喘息、慢性閉塞性肺疾患患者の血清IL-8濃度を測定した。COPD患者のIL-8値はBA群に比し有意に高値で喫煙量、1秒量の経年変化と有意な相関関係を示した。また、BA患者のIL-8値は安定期には低値であるものの発作時著明に上昇することが明らかとなる。実験担当。担当(pp.236~240)
86. 肺放線菌症の一例—診断・治療に関する文献的考察—	共	1996年	日本胸部疾患学会雑誌 34巻	田中繁宏・藤井達夫・大塚敏広・工藤新三・平田一人・栗原直嗣・吉川純一 症例は57歳、男性で主訴は痰。胸部X線写真・CTで腫瘤様陰影を呈した。気管支鏡検査等で診断に至らず、肺癌を疑い、左下葉切除術施行。切除肺より硫黄顆粒、糸状の菌糸の集簇を認め、肺放線菌症と診断。論文作成、症例の治療担当。全(pp.12)担当(pp.1380~1384)
87. 喀痰細胞診で悪性を疑った口腔天疱瘡の1例	共	1996年	日本臨床細胞学会雑誌 35巻	佐々木正臣・八幡朋子・浜田智美・若狭研一・伊倉義弘・後藤清・桜井幹己・田中繁宏 73歳、女性難治性口腔びらん入院。喀痰細胞診でボール状細胞集塊、相互封入像などが多数見られ扁平上皮癌を疑い正検するも肉芽を伴うびらんであった。異型扁平上皮細胞にIgGの特異蛍光を認め天疱瘡と診断。患者はステロイド治療で軽快し退院した。担当(pp.446~450)
88. 運動時低酸素血症の機序と臨床的意義	共	1996年	呼吸 15巻	藤本繁夫・田中繁宏・藤井達夫・栗原直嗣 慢性肺疾患患者の運動時低酸素血症の機序としてCOPD患者では、混合静脈血効果の要因に加え、PvO ₂ の低下の要因が関与している。IPF患者ではそれらに加え運動中の酸素拡散障害の要因が指摘されている。従って、EIHは安静時のPaO ₂ 、PaO ₂ の傾きと運動負荷量の因子によって決まる。実験担当。担当(pp.1125~1131)
89. ダザノラスト(ダザノール)が有効であったC型慢性肝炎合併の気	共	1995年	医学の門 37巻	金澤博・栗原直嗣・平田一人・工藤新三・田中繁宏・藤井達夫・少路誠一・川口俊・大塚敏広・沖塩協

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
管支喘息症例				一・武田忠直 担当 (pp. 431~433)
90. 降圧薬短期内服により VO_{2-k} kineticsの時定数が変化した本態性高血圧患者の1例—一定常負荷におけるCa拮抗薬、 β 遮断薬、ACE阻害薬内服の影響—	共	1995年	大阪市立大学保健体育学研究紀要 31巻	田中繁宏・宮本忠吉・大島秀武・藤本繁夫 23歳、男性の本態性高血圧患者に対して、3種の降圧薬短期内服による VO_{2-k} kineticsの時定数の変化を検討した。定常負荷でコントロールとくらべ、Ca拮抗薬では時定数が短く、酸素摂取量の応答を速くする可能性があり、 β 遮断薬では長く、ACE阻害薬ではあまり変わらなかった。論文作成、運動負荷検査担当。担当 (pp. 9~13)
91. 呼吸困難	共	1995年	臨床スポーツ医学 12巻 (臨時増刊号)	田中繁宏・藤本繁夫 スポーツ活動中に訴える症状のプライマリーケアのなかで呼吸困難に関する総説。呼吸困難の評価法 (Hugh-Jonesの分類、Borg scaleなど)、メカニズムやそれらの特徴について具体的に症例を提示して解説。論文作成担当。担当 (pp. 55~60)
92. COPD患者の運動療法評価における VO_{2-k} kineticsの検討	共	1995年	厚生省特定疾患 呼吸不全調査研究班 平成6年度研究報告書	栗原直嗣・藤本繁夫・大塚敏広・藤井達夫・田中繁宏・平田一人・武田忠直 COPD患者の運動療法に VO_{2-k} の時定数を用いた。その結果、訓練後の VO_{2-k} の時定数は最大運動能力の改善に伴って短縮した。この評価法は軽い負荷量の運動で評価でき、同患者の運動療法の指標として有用であることが示唆された。運動負荷検査担当。担当 (pp. 201~203)
93. 慢性肺疾患患者の運動時低酸素血症の発生要因の検討	共	1995年	日本胸部疾患学会雑誌 32巻 (第34回総会記録号)	藤本繁夫・栗原直嗣・平田一人・藤井達夫・田中繁宏・大塚敏広・若山公作・武田忠直 慢性肺疾患患者の運動時低酸素血症 (EIH) の発生要因を検討した論文である。すなわちCOPDのEIHは% D_{lco} と相関を示し、vernus admixtureと PvO_{2} 低下の要因が関与した。肺線維症患者では% D_{lco} と%肺活量の両者に相関を示し、運動中の酸素拡散障の要因の重要性を指摘した。運動負荷検査担当。担当 (pp. 101~108)
94. 健常者の水中歩行時の呼吸循環応答に及ぼす体重差の影響	共	1995年	関西臨床スポーツ医学研究会誌 5巻	宮本忠吉・大島秀武・藤本繁夫・田中繁宏・栗原直嗣・前田如矢 健常者の水中歩行時の呼吸循環応答に及ぼす体重差の影響を症例をあげて報告した。すなわち肥満者の水中歩行時では浮力による体重減少の影響が強く現れるため、健常者に比べ陸上での換気循環反応および自覚症状に及ぼす影響が軽減した。担当 (pp. 63~66)
95. 運動負荷時の VO_{2-k} kineticsに及ぼす下肢腸圧の影響	共	1995年	関西臨床スポーツ医学研究会誌 5巻	藤本繁夫・田中繁宏・宮本忠吉・大島秀武・栗原直嗣・前田如矢 運動負荷時の VO_{2-k} の時定数に及ぼす下肢腸圧の影響をみた論文である。その結果、 VO_{2-k} の時定数を規定する要因として、運動筋への酸素輸送能、酸素利用能に加え、運動筋からの静脈還流の要因の重要性を示唆した。(pp. 59~61)
96. Successful prophylaxis of wheat-dependent exercise-induced anaphylaxis with terfenadine	共	1995年	Internal Medicine 34巻	S. Fujimoto・N. Kurihara・K. Hirata・T. Kamimori・S. Tanaka・T. Takeda 小麦粉による運動誘発アナフラキシー症例を抗H1ブロッカーであるターフェジン投与により予防できた症例を報告。血中ヒスタミン値の上昇及び運動誘発じん麻疹が抑制され運動誘発アナフラキシーにおいてヒスタミンの重要性を示した。運動負荷検査担当。(pp. 654~656)
97. Angiotensin II stimulates peptide leukotriene production by guinea pig airway via AT1 receptor pathway	共	1995年	Prostaglandins Leukotrienes and Essential Fatty Acids 52巻	H. Kanazawa・N. Kurihara・K. Hirata・S. Kudou・T. Fujii・S. Tanaka・T. Takeda 気管支収縮物質ロイコトリエン (LT) とアンギオテンシンII (ATII) の相互作用を麻酔下モルモットを用いて検討。ATIIの気管支収縮反応はAT1受容体拮抗剤LT受容体拮抗剤にて有意に減弱。ATIIはAT1受容体を介してLT産生を促進させる可能性を示唆。担当 (pp. 241~244)
98. Hypereosinophilic syndrome—重篤な呼吸器症状を合併し、死亡した1例—	共	1995年	皮膚 37巻	鶴田大輔・持田和伸・染田幸子・浜田稔夫・大塚敏広・田中繁宏・工藤新三 79歳、男性の重篤な呼吸器症状を伴った、Hypereosinophilic syndromeの1例。皮疹は顔面を除き紅皮症様の状態。病理学上は混合型の多形紅斑で好酸球の細胞浸潤を認める部分も存在。当初、ステロイドが効果を示したが、後には無効で他臓器不全となった。症例の治療担当。担当 (pp. 45~51)
99. 肺気腫患者の上肢および下肢運動時の換気反応の検討—上肢運動訓練の効果について—	共	1994年	臨床スポーツ医学 11巻	藤本繁夫・栗原直嗣・藤井達夫・田中繁宏・紙森隆雄・大塚敏広・西本勝夫・小林茂・金尾頭郎・辻英次・前田如矢 肺気腫患者の上肢および下肢運動時の換気反応について上肢運動訓練の効果を検討した。2カ月間の訓

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
100. COPD患者の定常運動負荷時のVO ₂ -kineticsの意義	共	1994年	厚生省特定疾患 呼吸不全調査研究班 平成5年度研究報告書	練により、下肢の運動能には変化がみられなかったが、上肢運動時ではVTが改善し、換気量の軽減を伴って上司運動能が増した。担当 (pp. 943~947)
101. 気管支擦過細胞診にて診断した肺放射菌症の1例	共	1994年	日本臨床細胞学会雑誌 33巻	栗原直嗣・藤本繁夫・平田一人・田中繁宏・藤井達夫・大塚敏広・若山公作・武田忠直 COPD患者の定常運動負荷時のVO ₂ 時定数の意義について検討した。時定数はVO ₂ max、ATとの間には相関がなかったが、運動療法や各種治療前後での肺循環を含めた心循環系、運動筋への酸素輸送系の改善をみる指標として期待されることを報告した。運動負荷検査担当。担当 (pp. 125~128)
102. 両側性にビマン性一部融合像を示す浸潤様影と両側肺門リンパ節腫脹(BHL)を認めた肺サルコイドーシスの一例	共	1993年	呼吸 12巻	佐々木正臣・川口知哉・八幡朋子・若狭研一・桜井幹己・西坂誠泰・田中繁宏 担当 (pp. 1119~1123)
103. 肺気腫症例の上肢運動時の換気・循環に及ぼす影響—下肢運動との比較—	共	1993年	関西臨床スポーツ医科学研究会報告書 3巻	鴨井博・栗原直嗣・平田一人・川口俊・紙森隆雄・田中繁宏・若山公作・金沢博・藤原寛・藤井達夫・藤本繁夫・武田忠直 担当 (pp. 918~924)
104. 中高齢気管支喘息患者の運動制御因子と運動トレーニングの影響	共	1993年	臨床スポーツ医学 10巻	藤本繁夫・前田如矢・栗原直嗣・藤井達夫・紙森隆雄・若山公作・田中繁宏・宮本忠吉 担当 (pp. 117~120)
				栗原直嗣・紙森隆雄・岡本繁夫・平田一人・若山公作・田中繁宏・西本勝夫・小林茂・金尾頭郎・辻英次 運動負荷検査担当。担当 (pp. 649~654)
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 女子大学生(運動部所属及び非所属)におけるEating Atitudes Test-26及び体型アンケート調査による摂食障害傾向に関する意識調査	共	2016年2月	第30回日本体力医学会近畿地方会(大阪)	田中繁宏, 中岡優華, 宮本芙美香
2. 女子大学生における皮下脂肪厚, 骨密度, 内臓脂肪面積での体組成測定によるトレーニング効果に関する研究	共	2015年10月	第26回日本臨床スポーツ医学会 神戸	田中繁宏, 宮本芙美香
3. 若年女性でのDEXA法による体脂肪と超音波法による皮下脂肪厚の関係	共	2014年9月	第33回臨床運動療法研究会 大阪府Vol.16 No.1 2014 No1	宮本芙美香, 田中繁宏
4. インピーダンス法による内臓脂肪とエコーによる皮下脂肪厚との関係		2014年11月	第25回日本臨床スポーツ医学会 東京	丸尾彩, 宮本芙美香, 田中繁宏
5. 女子大学生の皮下脂肪厚と身体組成の関係に関する研究	共	2013年9月	第32回臨床運動療法研究会 愛知県Vol.15 No.1 2013 22	山本佐保, 丸尾彩, 田中繁宏
6. 日本の女子学生における白癬菌感染症に関するアンケート調査	共	2013年9月	第68回日本体力医学会(東京)	山本佐保, 田中繁宏
7. EFFECTS OF PELVIC FLOOR MUSCLE TRAINING IN JAPANESE FEMALE ATHLETES.	共	2013年6月27日	18th annual Congress of the EUROPEAN COLLEGE OF SPORT SCIENCE (June 26-29 Barcelona)	SAHO, Y., SHIGEHIRO, T.
8. 女子および男子大学生における運動時の腹圧性尿失禁に関するアンケート調査	共	2013年2月	第26回日本体力医学会近畿地方会(大阪)	山本佐保, 大島秀武, 田中繁宏
9. 体育系学生と非体育系学生における運動時の腹痛に関するアンケート調査	共	2013年10月	第24回日本臨床スポーツ医学会 熊本	山本佐保, 丸尾彩, 田中繁宏
10. A STUDY OF STRESS RELATED TO URINARY INCONTINENCE IN HIGH SCHOOL AND UNIVERSITY-AGE FEMALE ATHLETES	共	2011年7月7日	16th annual Congress of the EUROPEAN COLLEGE OF SPORT SCIENCE (July 6th- 9th Liverpool)	SAHO, Y., SHIGEHIRO, T.
11. LEARNING EFFECT ON EACH CEREBRAL HEMISPHERE OF TASKS PERFORMED BY ATHLETES USING THE NONDOMINANT	共	2010年6月26日	15th annual Congress of the EUROPEAN COLLEGE OF SPORT SCIENCE (TURKEY)]	KANA, G., SHOUICHI, K., KEIKO, M., SHIGEHIRO, T. . .
12. RELATIONSHIP BETWEEN EXERCISE CAPACITY EVALUATED BY ERGOMETER AND SKINFOLD FAT THICKNESS MEASURED BY ULTRASONOGRAPHY	共	2010年6月26日	15th annual Congress of the EUROPEAN COLLEGE OF SPORT SCIENCE (June Antalya TURKEY)]	エコーによる皮下脂肪厚がエルゴメータ使用での運動能力と創刊することを示した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
13. エルゴメータによる運動能力と 下肢脂肪厚との関係	共	2010年1月	第24回体力医学会近畿 地方会 (兵庫)	前田亜美、三宅里奈、山中望、古林江梨、田中繁宏
14. 体育系学生と非体育系におけるAE Dに関するアンケート調査	共	2010年1月	第24回体力医学会近畿 地方会 (兵庫)	前田亜美、三宅里奈、山中望、古林江梨、田中繁宏
15. 女子体育系学生と非体育系の起床 困難に関する研究	共	2010年1月	第24回体力医学会近畿 地方会 (兵庫)	三宅里奈、前田亜美、山中望、古林江梨、田中繁宏
16. Carotid flow volume in evaluat ing exercise capacity	共	2009年6月25 日	14th annual Congress of the EUROPEAN COLLE GE OF SPORT SCIENCE (june 24-27 2009)	若年女性で頸動脈流量が運動能力評価で有用であることを示した。
17. 13. 運動と内科一突然死、熱中症	単	2007年10月		
18. 講演B 4. 熱中症とその予防	単	2007年07月		日本臨床スポーツ医学会主催「スポーツ医学の展望」(競技能力向上とスポーツ障害の予防)で熱中症の発症頻度、熱中症の発現場場の変遷(職場からスポーツの現場へ)などについて講演した。熱中症の発生原因、予防、対策に関しても口演した(大阪市立大学医学研究科 学舎4階大講義室)。
19. 2次健康診断での脈波伝搬速度計 測導入の試み	共	2005年10月		武田弥生、田中繁宏、野乃上あさ子、四元美帆、中村真理子、内藤義彦
20. 思春期の運動習慣による骨密度の 変化に関する検討	共	2005年09月		高橋直美、相澤徹、浦野瞳、岡本弥子、田中繁宏、野老稔、鳥居俊
21. 若年健常女性での運動能力とアディ ポネクチン、レプチンとの関係	共	2005年09月		田中繁宏、四元美帆、中村真理子、相澤徹、松本裕史、小柳好生、野老稔
22. 最大酸素摂取量と超音波検査法に よる心機能および頸動脈血流量との 関係	共	2005年09月		四元美帆、田中繁宏、中村真理子、松本裕史、小柳好生、相澤徹、野老稔
23. 大学女子新体操選手の生活習慣と 骨密度 の関連に関する研究	共	2004年10月		大久保佳美、相澤 徹、高橋直美、浦野ひとみ、村川増代、中村真理子、四元美帆、小柳好生、田中繁宏、野老 稔
24. Balance pad exercise may atten uate falling risks in geriatric health services facility res idents	共	2004年06月		K. Ishihara・K. Nishimoto・T. Mimura・S. Tanaka ・S. Fujimoto
25. Relationship between the kinet ics of peripheral muscle oxyge nation and systemic oxygen int ake during prolonged exercise	共	2004年06月		T. Mimura・H. Fujiwara・S. Tanaka・K. Ishihara ・T. Hara・H. Nakao・L. Wang・S. Fujimoto
26. Relationship among muscle oxyg enation, muscle blood volume a nd leg blood flow during prolo nged exercise	共	2003年05月		T. Mimura・ S. Tanaka・T. Kawarabayashi・ K. Is hihara・T. Hara・H. Nakao・H. Fujiwara・S. Fuji moto
27. Functional fitness norms on liv ing at home independently in Japanese elderly women	共	2003年05月		K. Ishihara・T. Mimura・K. Nishimoto・S. Tanaka ・S. Fujimoto
28. Relationship between muscle ox ygenation trends and lactate a ccumulation during prolonged c onstant work-rate exercise	共	2002年05月		T. Mimura・S. Tanaka・K. Ishihara・T. Hara・T. Wadazumi・T. Miyamoto・S. Fujimoto
29. ガス交換の場としての筋肉と運動	共	2001年06月		田中繁宏・藤本繁夫
30. Significance of muscle oxygena tion measured by NIRS during p rolonged exercise below AT	共	2001年05月		T. Mimura・S. Tanaka・K. Ishihara・T. Wadatsumi ・T. Miyamoto・S. Fujimoto
31. シンポジウム1 拘束性肺疾患と 運動	共	2000年09月		藤本繁夫・田中繁宏・岡本隆志・平田一人・栗原直嗣
32. シンポジウム「高齢社会における 運動・スポーツの役割」平均80 才の高齢者に対する安全で簡便な 日常の基本動作を用いた訓練効果 の検討	共	2000年06月		西本勝夫・石原一成・三村達也・田中繁宏・藤本繁夫
33. Significance of physical fitne ss on living at home independe ntly in Japanese elderly women	共	2000年06月		K. Ishihara・T. Mimura・T. Wadatsumi・K. Nishim oto・Y. Ishizu・A Kataoka・J. Hama・S. Tanaka・ S. Fujimoto
34. Relationship between muscle ox ygenation trends and substrate utilization during prolonged constant work-rate exercise	共	2000年06月		T. Mimura・S. Tanaka・T. Wadatsumi・K. Ishihara ・J. Hama・A. Kataoka・Y. Ishizu・S. Fujimoto
35. メディカルチェック運動療法Up D ate 運動療法Up Date	共	1999年02月		藤本繁夫・田中繁宏
36. Lymphocyte subset responses to light and heavy ergometer exe rcise in healthy subjects	共	1998年06月		S. Tanaka・Y. Oshima・T. Wadatsumi・A. Matsuoka ・C. Sawada・K. Hayakawa・S. Fujimoto

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
37. Significance of decrease in the muscle oxygenation curve by near infrared spectroscopy (NIRS) during ramp exercise	共	1998年06月		T. Wadatsumi・Y. Kimura・Y. Oshima・T. Miyamoto・S. Tanaka・S. Fujimoto
38. 地球環境下での運動 水中（水圧、水抵抗）の歩行運動	共	1998年01月		田中繁宏・宮本忠吉・大島秀武・前田如矢・藤本繁夫
39. 内科領域における慢性疾患とスポーツ 1) 呼吸器疾患とスポーツ	共	1996年10月		藤本繁夫・田中繁宏・宮本忠吉・大島秀武・前田如矢
40. Effects of exercise training on ventilator threshold, isocapnic buffering and time constant of V _O ₂ kinetics in athletes	共	1996年06月		Y. Oshima・T. Miyamoto・S. Tanaka・N. Kurihara・K. Maeda・S. Fujimoto
41. The effect of loratadine on the number of coughs induced by hypertonic saline inhalation in nonasthmatic chronic cough patients and normal volunteers	共	1995年04月		Shigahiro Tanaka・Kazuto Hirata・Seiichi Syoji・Naotsugu Kurihara・Takanao Takeda
42. THE EFFECTS OF LORATADINE ON THE NUMBER OF COUGHS INDUCED BY UNDW IN NON-ASTHMATIC CHRONIC COUGH PATIENTS NORMAL VOLUNTEERS	共	1994年10月		S. Tanaka・K. Hirata・T. Otsuka・T. Fujii・N. Kurihara・T. Takeda
43. REPRODUCIBILITY AND SIGNIFICANCE OF V _O ₂ -KINETICS DURING CONSTANT LOAD EXERCISE IN PATIENTS WITH CHRONIC OBSTRUCTIVE PULMONARY DISEASE	共	1994年10月		T. Otsuka・T. Fujii・S. Tanaka・K. Wakayama・K. Hirata・S. Fujimoto・N. Kurihara・T. Tkakeda
44. THE EFFECTS OF PULMONARY HYPERTENSION ON EXERCISE CAPACITY IN PATIENTS WITH PULMONARY EMPHYSEMA	共	1994年10月		T. Fujii・T. Otsuka・S. Tanaka・K. Hirata・S. Fujimoto・N. Kurihara・T. Takeda
45. 内科疾患における運動処方 の現状 慢性呼吸器疾患と運動処方	共	1994年		栗原直嗣・藤本繁夫・平田一人・田中繁宏・藤井達夫・大塚敏広・西本勝夫・小林茂・金尾顕郎・大谷真由美・辻英次
46. Pulmonary hypertension during exercise in patients with pulmonary emphysema	共	1994年		T. Fujii・T. Otsuka・S. Tanaka・K. Hirata・S. Fujimoto・N. Kurihara・T. Takeda
47. EFFECTS OF OXITROPIUM BROMIDE AND FENOTEROL HYDRO BROMIDE ON DISTILLED WATER OR CAPSAICIN INDUCED COUGH IN NORMAL SUBJECTS	共	1993年09月		S. Tanaka・K. Hirata・T. Fujii・T. Kaminori・K. Wakayama
48. NEW MACROLIDE, ROXITHROMYCIN, REDUCES BRONCHIAL HYPERRESPONSIVENESS AND SUPEROXIDE ANION PRODUCTIONS BY PMN LEUKOCYTES IN ASTHMATIC	共	1993年09月		H. Kamoi・H. Fujiwara・K. Hirata・H. Kanazawa・K. Wakayama・S. Tanaka・T. Kamimori・T. Fujii・N. Kurihara・T. Takeda
49. Comparison of the bronchodilating effects of an anticholinergic (oxitropium) and β 2-adrenergic in patients with chronic asthma of older age	共	1993年		N. Kurihara・T. Kamimori・K. Hirata・S. Fujimoto・K. Wakayama・S. Tanaka・T. Fujii・H. Kanazawa・T. Takeda
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
1. Increased Adipose and Muscle Insulin Sensitivity Without Changes in Serum Adiponectin in Young Female Collegiate Athletes		2017年15(5)	Metabolic Syndrome AND Related Disorders	持久性トレーニングと体組成、アディポカイン、炎症性マーカーなどとの関係は若年アジア人ではほとんど研究されていない。インスリン感受性(抵抗性)に関して、運動選手(170人)及び一般学生(311人)(18-24歳)で検討した。血液中レプチンとTNF- α はアスリートで低かったが、アディポネクチンやインスリン抵抗性は差がなかった。持久性トレーニングは脂肪組織や骨格筋のインスリン感受性を良くするが正常体重若年女性間では血液中アディポネクチンは差がなかった。
2. 全日本女子バレーボールチームのロシア遠征、ドイツ合宿		2007年06月		全日本女子バレーボールチームのエリツイン杯参加のためロシア遠征帯同。その後のベルリンでのナショナルトレーニングセンターでの合宿に医師として帯同した。
3. 全日本女子チーム中国遠征		2004年04月		2004年4月7日から4月16日まで全日本女子チーム中国遠征にチームドクターとして帯同。
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 健康スポーツ医学講習会(平成19年度：10月27日～28日、場所；大阪府医師会館：共催；近畿医師会連合、大阪府医師会 後援；日本医師会)において講師として第2日目運動と内科一突然死、熱中症についてお話をした。		2007年		
6. 研究費の取得状況				
1. 基盤研究 (C) 継続		2006年		女子アスリートの筋力トレーニングにおける成長ホルモン分泌の影響
2. 基盤研究 (C) 継続		2005年		女子アスリートの筋力トレーニングにおける成長ホルモン分泌の影響
3. 基盤研究 (C) 新規		2004年		女子アスリートの筋力トレーニングにおける成長ホルモン分泌の影響
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			
	日本臨床スポーツ医学会			
	日本体力医学会			